

平成25年度西宮文学案内

秋講座 第3回「遠藤周作トカトリック夙川教会～オペラ『沈黙』を中心に」

日時：2013年12月7日（土）14時から

場所：カトリック夙川教会地下ホール

講師：土居 豊（作家・文芸レクチャー）

土居 皆さんこんにちは。今日は12月の最終日というなか、教会がちょうどクリスマス前でして、ふだんはボランティアの方が案内をされておられます。本日、皆様大勢いらっしゃっていますが、「西宮まちたび博」で夙川教会の紹介というプログラムがありましたので、こちらとかぶってしまっておりました。

最初にお断りしておきますが、カトリック夙川教会のことにに関して私自身は特にカトリックではなく、この場でありがたいお話をする力はありません。ただ、遠藤周作の文学に関して調べていたことがあります。今回テーマとしましては、遠藤周作の信仰の問題、そのもっとも最上作の1つである小説であり、オペラ化された「沈黙」のことをお話ししようと思っております。最初は、教会の中でお話をできたらいいなと思っていましたが、実際に教会の中を見てもみると、ちょっと恐ろしい感じがしまして、今回のように地下ホールでの実施となりました。

さて、前置きが長くなりましたが、今日のお話のレジュメは、お手元にお渡ししております。それを参考にしながら進めていきたいと思います。

途中でオペラの映像を交えながらお話していきます。

遠藤周作の小説「沈黙」を読まれた方はどれくらいいらっしゃいますか。おー、みなさん詳しいですね。では、オペラ「沈黙」を観るか、聴くかされた方はいらっしゃいますか。ずいぶんいらっしゃいますね。と言いますのは、オペラ「沈黙」は、日本のオペラの中でもポピュラーではなく、コンサートとかテレビとかでよく上演されるものでないのです。そうしましたら、「沈黙」のあらすじについては、ご存知ということでカットいたします。オペラに関しては、ほとんどご覧になったことがないことを前提にお話します。「沈黙」の話の前に下世話な話ですが、遠藤周作さんは夙川カトリック教会の信者として、子どもの頃この教会に通っておられました。当時、一緒に通っていらっしゃった方が信者さんの中にはおられるかと思えます。今回の講座のために、少し事情を知りたいので夙川教会の方に少しお話を聞き資料を見せて頂きました。われわれ文学を愛好する者からすると、遠藤周作さんは昭和を代表する偉大な作家であります。しかし、教会からすると熱心に通っていたわけでもなく、しかも遠藤周作さんの性格上、ずいぶん悪いことをしたらしい。代表的な信者さんと言えるかどうか…。エッセーのなかでも、えらい悪いことをしたらしいと書かれています。代表的なものは、鐘の鳴る塔の上に登ってオシッコをしたと書いてある。もう1つは、礼拝中に犬を連れ込んで大騒ぎしたとあります。あと、礼拝する正面の十字

架のあたりに上ったとか。やりたい放題に書いてあります。ふつうの人であれば、いたずらだったで済んだでしょうが、遠藤周作さんの文学、エッセーを読まれた方は、どこまで本当だったのか疑いますね。別名「狐狸庵」さん、テレビにもよく出てインタビューを受けておりますが、非常にいたずら好きでユニークな方でした。書かれるエッセーも、芸風を反映してユーモラスで面白い。ですので、カトリック信仰の問題をつきつめた、まじめで、深刻な小説を書かれる遠藤周作と、ふざけまわっている遠藤周作の2つのイメージがあるわけです。夙川教会にまつわる話ということであれば、文春文庫の『心のふるさと』の文章の中に、さきほどのエピソードが詳しく書かれています。おそらく私が想像するに、塔には上ったであろうと思う。見当つかないが、まあ最後まではなかなかだが途中までは上って、大人たちが大騒ぎしたくらいかなと想像がつきます。一方、犬を連れ込んだ話は、多くの目撃談があったようで、犬を連れ込んだおかげで、しばらく当時の神父さんにより出入り禁止になったということです。恐らく事実でしょう。エッセーによると、犬を連れ込んだのは、別にわざとではないというわけなのですが、エッセーの中にでてくるメルシェ神父、この方は遠藤周作の初期小説「黄色い人」のモデルになっている大変立派な神父で、戦時中も思想的な迫害を受け、敵性外国人として逮捕されています。しかし、解放されたあと、日本人を恨むことはなかった。その一方、そのメルシェ神父は、遠藤周作さんに子どもっぽいことをするところもあったようです。犬が嫌いで、犬を見ると石を投げる。遠藤周作さんがかわいがっている犬がついてくると、犬の嫌いな神父は石を投げて追い払うとか。そんなわけで、遠藤周作さんは、自分は悪くない。犬が悪いと。もともと石を投げるのが悪いと。夙川教会に通った信者としてのあり方は大変まじめというわけにはいかない。ただ、ご自身がエッセーの中に書かれているほど悪くはなかったのではないかなあとと思います。ただ、いろいろな目撃談があって同時期に通っていた子どもの親に、遠藤周作さんが有名になってから、自分の子どもに、周作さんが石を投げるのが困ったと聞かされていたようです。カトリック夙川教会には、残念ながら善行児童は伝わるが悪童の伝説が伝わっていない。エッセーの中に書かれているくらいしかなく、どこまで悪いことをしたか、私としてはいいほうに解釈しています。

話を先に進めますが、そのような遠藤周作さんですが、エッセーでは人気のある大衆小説的な作品を書かれています。信仰の問題を扱った非常に重いテーマの小説を書いている。そのなかでももっとも知られているのが「沈黙」だろうと思います。テーマは信仰する意味といいますか、神に見捨てられた存在、調べてもよくわからないのですが、遠藤周作さんの「沈黙」はよい影響を与えなさそうなので、カトリックのところでは禁書になったとか、なりかけたとか。カトリック教会の方としては「沈黙」は信仰の疑いを抱かせるので禁書になりかけました。そのせいなのか、ノーベル文学賞の候補にあがったのですが、教徒の団体から圧力があって落選したとか。どこまで本当かはわかりませんが、巷ではそう伝わっています。「沈黙」は、カトリックの信仰をテーマにした作品ではあるが、逆に神を信じることのむずかしさ、神に見捨てられた信者の苦しみ、そういう重いテーマを持っ

ています。そうすると、私などは信仰にうすいのでそういう苦しみですとか、まあ、そうそう世の中うまくいかんだろうとか思ったりします。今画面に出していますが、「沈黙」が現在ハリウッドで映画化が進行中だそうです。マーティン・スコセッシが監督を引き受けています。進行中というのは、なかなかできあがっていないのですが、どうも渡辺 謙さんが出るらしい。昔、日本映画としてありましたが、ハリウッド映画になる楽しみでもあります。

ちょっと画面にしたがって話をすすめますと、大きな問題というのは、常に信仰に疑いを抱きながら板ばさみの感情を文学でとらえているということでもあります。

画面を出しておりますが、遠藤周作さんのお母さんは仁川の教会で神父さんに会い、お父さんとは遠藤周作さんが小さいころ離婚し、大陸から引き上げ母子家庭になり、小林聖心の音楽の先生となり仁川の教会に通っていました。遠藤周作さんとお兄さんは夙川教会に通っていた。その頃のエピソードを書いた「黄色い人」の小説の中では、舞台が仁川になっていますので、関西学院の学生の描写とか、仁川の周辺が描かれています。時代的には戦争末期の空襲があり、仁川周辺も殺伐とし、明日をも知れない状況の中で、こころのすさんだ状態の中で、信仰を捨ててしまったような元神父が登場しますが、もう一人の神父のモデルであるメルシェ神父は名を変えて登場しスパイとして逮捕されています。

戦争が終わり解放されたメルシェ神父は夙川教会に戻ったわけですが、その時は、遠藤周作さんは夙川にいたわけではありません。教会の駐車場の向こうに教会の事務所があり、ご挨拶に伺った時、事務所向かい側の談話室の壁に歴代の神父さんの写真が飾ってありました。右端のブスケ神父という方が、この夙川教会の一番最初の神父さんです。三代目になりますのがメルシェ神父です。見るからに謹厳、まじめそうな神父です。

「沈黙」の話に戻します。「沈黙」に関してご存知と思いますが、要は問題になるのは、カトリックの司祭が「踏み絵」を踏まされたという歴史的な事実であり、カトリック弾圧の歴史をもとに、自らの信仰した神に対する疑いであったり、葛藤があり、それらを小説の中にうまく盛り込んだというのがあらすじです。小説としては、いわゆる歴史小説の部類に入ります。すぐれた小説ですが、これをオペラ化しようと考えたのが作曲家の松村禎三さんです。松村さんの作品は、「沈黙」以外では映画音楽をたくさん作っておられますが、現代音楽のようでむずかしい。一般的な聴いていいなあと思うような作品とはちょっと違います。オペラ「沈黙」も美しい旋律がでてる作品ではなく、なかなか難しい内容です。それを完成し1993年に初演、日生劇場で上演しているわけですが、映像としては出ていません。CDは出ていますが、映像ではなかなか見れません。ただ日本人が作曲したオペラで、何度も何度も劇場で上演された作品はほとんどなく、もっとも上演回数が多いのは、團伊玖磨の「夕鶴」ですね。その他の日本人作曲のオペラが繰り返し上演されたのはあまりない。その中でこの「沈黙」というオペラは、ちょうど去年、新国立劇場で再演されたのが6回目です。6回も上演されているのは非常にめずらしい。そのうち、1993年の初演の時は日生劇場で、それ以降、東京新国立劇場がレパートリーとして上演しています。あ

とは関西で、大阪音楽大学で上演しています。せっかく西宮ゆかりの遠藤周作さんの作品ですので、私としては兵庫県立芸術文化センターがこれを上演すべきでないかと思います。

写真は、私が取材したときの新国立劇場の劇場前のポスターです。これをきっかけにオペラの舞台裏を取材しようと思いました。だいぶ前ですが、2005年大阪音楽大学のオペラハウスで「沈黙」を上演することになりました。阪急庄内駅の近くのオペラハウスで上演され、その時、密着取材したものです。今日は、遠藤周作の文学がいかにもオペラ作品のように別ジャンル化されて再演されているかをお話したい。もっとも問題になりますのは、小説では最後になりますが、司祭ロドリゴは最終的には「踏み絵」を踏むわけです。皆さんはご存知ですが、キリシタン弾圧の中で司祭自ら踏み絵を踏まされる展開になり、踏み絵を踏んだ後、信仰を棄てた形になっている。もっともクライマックスになるところです。「沈黙」はカトリックの中では危険な小説とみなされたわけです。何が危険か、最大の問題点は、踏み絵を踏むところにある。カトリックの司祭であるロドリゴが踏み絵を踏むということ自体が問題なのですが、それは歴史的事実でしょうがない。何が問題かといいますと、遠藤周作の小説の中では、ロドリゴが踏み絵を踏む直前にイエスの声が聞こえるわけです。赦す声が聞こえる。つまり、ロドリゴが自ら信仰を棄てて踏んだのではなく、むしろ、イエスが赦したということになっている。そこが問題らしいのです。問題なのは「踏んでもいいよ」と神様が言ったかどうかというところで、小説では神の声が聞こえたとなっています。それをオペラにするとときに、なんとなく想像するのは、どう音楽で表現するのか興味深い。小説の中では、イエスの声が踏んでもいいよと聞こえる。それをオペラにするとときに踏んでもいいよと歌詞があり、歌にするとして、そこが一番興味がある。オペラとしての表現は、実際に聴くとなるほどと感心させられます。

写真がぼやけていますが、これは隠し撮りみたいなもので、一番左端のおじいさんが作曲者の松村さん、左側が奥様で、話しているのが主催者です。2005年当時、まだ松村先生はお元気でいらっしゃって、糖尿病で重い病気になったのですが上演の時、常に練習からこられました。この新国立劇場のリハーサルの時もずっーといらっしゃった。指揮者がいて、演出家がいて、あちこちから指示がとぶわけです。松村さんもけっこう注文をつけられた。そこの歌は音がちがうとか突然言われた。何度も上演するうちにいろいろマイナス面がでてくるのか、気が変わるのか、やるたびに所々変わるらしいです。

さて、オペラ「沈黙」の方が、小説「沈黙」と少し設定が変わっております。それは、主人公の司祭ロドリゴが、恩師フェレイラを追って日本にやってくる。日本人で準主役的なキチジローは小説とほぼ同じで、オペラでも非常に重要な役をしております。もっとも違う点は、説明にもありますが、二人の若いカップルが登場します。原作では女性の主人公はいない。女性の声を出すために、新たに若い娘のオハル、恋人であるモキチの若いカップルが準主役的な役割をします。この2人は殉教、死んで行くわけです。

さて、オペラを取材した時の資料をみますと、日本の昔の、江戸時代の長崎でのお話ですので、見た目もそれらしく衣装を作ってやっています。

(画面にオペラ衣装の写真を映写)

村人の衣装は何となく素朴な感じで、帯でなくて縄ですね。あまりみすばらしいのもだめだし、往々に遠めに何か印象的に見えるような、ちょっと凝った模様が描かれている。模様としては黒い色合いで、汚れたようにも見えます。弾圧する側の奉行のスタイルですが、ちょっと凝った色合いにしてある。江戸時代的な衣装であります。左の弾圧する側と、右のされる側。右側の女性が白い衣装で、死んでいく白い装束を召されている。見た目は、普通の時代劇っぽい衣装です。

(画面にオペラの指揮者と歌手の写真を映写)

左側は指揮者の山下一史さんで、右側は主役のロドリコを演じた小餅谷哲男さんです。主役のテノールの小餅谷さんいわく、日本語のオペラはイタリア語のオペラと違って非常に歌いにくい。セリフを覚えるのが大変だ。本当はあまりやりたくないとのこと。さて、舞台装置の写真があり、色見本がある。舞台が変わっていくわけですが、正面の映像をご覧ください。

(画面にオペラの舞台写真を映写)

このオペラの場合、基本的には真ん中に丸い第一場の舞台があり、その周りで話がすすみます。一番最後の場面は一番右端の何も置いていない白い台、それから、これが背景の色の見本です。これはスタッフさんの資料を出していただいて、背景のグリーン上のいろいろな色を映し出して、かなり凝った照明操作をやっています。そういう光の効果があって、これも青やカラフルですが、オペラの小道具を一杯舞台袖に用意しており、ごちゃごちゃと置いてあるように見えます。左下に無造作に置かれている、これが踏み絵で、キリスト像が彫りこんである。客席から見ると、踏み絵がキリスト像かわからない。巻物があったり、机の上に花束が置かれてあったりします。左の何かお茶のセットが置いてありますが、これは長崎にはありません。ロドリコが日本に来る前に、マカオにあった教会で日本の話をしている時にお茶をたてている。

その後ろに赤ん坊が寝てますが、もちろん人形です。

実際に、映像を見たいと思います。画質が悪く、音も悪いので申し訳ないのですが。

(オペラのテレビ放送録画を上映)

オペラが一番最初のところですので、少しお話をします。1993年の日生劇場での初演のもので、私が取材した2005年の新国立劇場のものではありません。

※オペラ『沈黙』

第1幕第1場「火磔」の場面

キチジローの両親と妹が火の中で磔にされている。殉教者の「参ろうやな、参ろう」という合唱と、村人たちのキチジローを語る声が交錯する。

真っ暗です。暗いので説明しないとわからない。なんとなく人のシルエットが見えますが、これは弾圧される信者たちの姿で、いきなり火焙りされるシーンです。

こんなシーンです。この火焙りの時に、家族を見殺してキチジローだけが逃げています。

この後、主役のロドリコが出てきて、キチジローとマカオで出会い日本へ消息を絶ったフェレイラを追ってやってくるという展開になります。

オペラで非常に印象的な場面があります。

※オペラ『沈黙』

第1幕第5場「山上のアリア」の場面

ロドリゴの主を讃えるアリア。ハ長調で書かれている。

この最初の方、「山上のアリア」の場面が、主役ロドリコの最初の見せ場であって、弾圧に耐える日本のクリスチャンたちに熱狂的に歌い上げて、日本に信仰を取り戻そうと希望にあふれた場面で最も明るい場面です。

非常に自分の信仰の喜びと、神のありがたさを宗教的陶醉にひたっている場面のアリアです。そして、だんだん現実の苦しい弾圧に「あげておいておとす」という悲しい運命になるわけですが、この美しい場面があり、どんどん暗くなる。その時のロドリコには、神の声は聞こえていたはずであります。この後、信者たちが弾圧されていくのを見ながら何もできない、板ばさみになり落ち込んでしまったロドリコには神の声、救いの声が聞こえなくなります。非常に皮肉な展開になる。信者の弾圧ぶりが、ひどいいじめぶりである。映画と違い生々しいことはしませんが、鬼のような奉行が楽しそうにいじめる場面が見所です。弾圧される信者を、ロドリコが踏み絵を踏めば信者を助けるという卑劣な場面です。

※オペラ『沈黙』

第2幕第11場「海辺」の場面

村人たちが処刑されようとしている。井上はロドリゴに「お前が先に転べば皆の命が助かる」というが、ロドリゴは棄教を拒絶する。

あまり汚れていてわからないのですが、腕を捕まれているのはロドリコです。奉行に「お前が踏み絵を踏めば、信者たちの命を助けてやる」と言われ、うろたえている場面です。このように、信者が目の前で殺されていくのを見ているしかないのですが、その時「どうして神は救ってくれないのですか」と板ばさみになるわけです。

これが、ものすごく本題の場面です。このオペラの1番の見所かもしれません。

簀巻きにされ、海に落とされる村人の女性が天国にいると歌っているのですが、ロドリコには見えない。こういうところがオペラの大事な場面です。

自分の信仰に迷ってしまっているところで、最後ですけれども、オペラの場合、ロドリコが最後に踏み絵を踏む時になるのですが。

※オペラ『沈黙』

第2幕第15場「白い朝」の場面

ロドリゴの前に踏み絵が置かれる。ロドリゴは踏み絵の中のキリストに向かい「あなたは本当におられるのか」とアリアを歌う。

同第16場

ロドリゴは踏み絵に足をかける。遠くから「Ora pro Nobis」の合唱が響いてきて幕が降りる。

これは、ロドリコが踏み絵を踏んでいる場面ですが、小説の同じ場面では踏む直前に、イエスが「踏んでいいよ」となっている。しかし、オペラでは、まったく歌なしで音楽だけ、伴奏だけ、これが非常に興味深いわけですが、小説では、イエスが語りかけた言葉、「声が聞こえた」と書かないと伝わらない。オペラになると想像の余地を残した。神の赦しの声が聞こえたかもしれない、聞こえなかったかもしれない。どちらともとれるわけです。ただ、背景がいかにも何か救いのイメージが、光の視覚的な効果でされている。イエスが赦したことになっていないので、このオペラは禁止にはならない。ある意味、小説と舞台との表現の違いでこういうふうになる。あとは観る人により、赦したと受け取るか、赦されなかったと受け取るかは違う。要はロドリコの、信者が死んでいく場面と、この最後の幕切れとを比べた時に救われたイメージが強い印象ではあります。そんな感じで、オペラの場面は、最後は踏み絵を踏んで終わることになります。全体的には非常に暗くて重い作品ですが、新鮮な、深刻な、斬新なテーマだと思います。

駆け足でオペラの舞台裏を取材しましたが、こんなふうに舞台俳優の動きはかなり綿密に考えられているのです。

(画面にオペラの舞台資料を映写)

中央の丸く書いてある絵がオペラの第一場です。

キリシタンたちが連行されて行く場面の動きを見ます。列車みたいなのを繋げて書いていますが、順番を指示しているわけです。左側の図面と右の楽譜と音のタイミングで動きがわかるように組み合わせられています。これは照明のタイミングの表です。私にはよくわかりませんが記号が書いてあり、それに合わせて色が変わるようになっています。

(画面にオペラの練習写真を映写)

これが練習場面です。まだ初期の頃の練習です。非常に長く練習するものだと思います。歌いながら場面をなぞっていく。実際、ホールで練習するときも、まだ歌手たちがどういう風に動くのか、何も聞いていない状態で練習します。座っているのは演出の人たちと、音楽の人たちと指揮者とです。だんだん仕上がっていくと、オーケストラに合わせて歌の練習をし、だんだん佳境に入っていくのですが、実際、新国立劇場に行くと、こうやって舞台を作っているところになります。

これはリハーサルの時の状態ですが、左の客席に指揮者がいて、オーケストラピットという一段下がったところにオーケストラが入っています。こんな感じでオペラが出来上がっていくまで、なかなか興味深いのですが、ただでさえややこしいのに、作曲家がやってきて楽器屋さんに指示をだしたり、何度も上演されていく中で少しずつブラッシュアップされていくのかなと思います。「沈黙」が小説として優れているのはもちろんですが、映画化されたり舞台化されたり、ハリウッドが映画化しようとしたり、いろんな形で作り直されていくのは、テーマである「信仰の苦しみ」という普遍的なテーマを扱っているからだと思います。宗教は違っても、悩みは同じではないか。日本だけでなく世界中のいろいろな人が「沈黙」を読み、舞台化されたのを観ているのだと思います。

遠藤周作の小説の原点は、「カトリック信仰」と「信仰を信じきれない自分」との板ばさみの苦悩が原点になっているということが定説になっています。それをもっともわかりやすく描いた作品が「沈黙」です。それをいろいろな形で舞台にしたり、映画にするのも信仰の苦しみがテーマとなっています。

今日は、信仰深い話にはなりませんでした。遠藤周作の根本である「信仰」についてお話をさせていただきました。